

午後 I 試験

問 1

問 1 では、コンビニエンスストアの本部業務を支援するシステムを例にとり、事業継続計画の策定とそれに基づくシステムの変更について出題した。

設問 1 は、いずれも問題文をしっかりと読めば解答できる問題であり、正答率は高かった。

設問 2 は、業務処理プログラムについて問うているにもかかわらず、それ以外のシステム全体について解答したものが散見された。

設問 3 は、縮退運用解除後の販売データの取込みについて問うたが、店舗には障害発生時以降のデータしか蓄積されていないと誤解し、“店舗に蓄積された販売データを漏れなく取り込む”とした解答が散見された。

設問 4 は、(1)が“感染症患者の増加によって出勤者が制限されている場面”，(2)が“感染症の更なる流行による本社ビルの閉鎖・東西両センタへの入館制限の場面”について問うている。本問にはこの他に“発注処理の東西二重処理だけ行っている場面”と“関東センタの長期間使用不能時の関西センタでの縮退運用の場面”という四つの場面が記載され、それぞれの対応策を述べているが、これらを混同して解答した受験者が多かった。

システムアーキテクトとして、常日頃から、起こり得る災害の場면을想定し、そのリスクへの対策を講じておくよう心掛けてほしい。

問 2

問 2 では、製造業の基幹業務の一環である、購買管理システムを例にとり、購買業務を踏まえたシステムの設計について出題した。全体として、題意はよく理解されていたようであった。

設問 1 は、正答率が高かった。設問 1(1)の誤った解答としては、発注予定日の算出において購買リードタイムだけを使用し検収日数が考慮されていない解答が散見された。設問 1(3)の誤った解答としては、所要量と基準発注ロットの関係の理解不足によると思われる計算上の間違いが多かった。

設問 2 は、正答率が高かった。設問 2(1)では、システム上納品という行為は把握していないにもかかわらず、納品を基準にした解答が散見された。納品と検収の違いを理解しておいてほしかった。

設問 3 は、正答率が低かった。解答のほとんどが、買掛金への計上か原材料勘定への計上かどちらか一方であった。本設問での検収という取引が会計上、買掛金という債務の増加と原材料という資産の増加の両方につながるということを、システムアーキテクトとしては理解しておいてほしかった。

設問 4 は、正答率が高かった。

システムアーキテクトとして、業務要件を十分に理解した上で、当該システム及び関連システムとの連携の設計が行えるよう心掛けてほしい。

問 3

問 3 では、利益管理システムを例にとり、既存システムの業務変更要件に基づくシステムの変更について出題した。

設問 1 は、業務要件の変動が予測される場合のシステムの対応について問う設問であったが、正答率は低かった。ファイルのデータ変更で変動要素を吸収しておけば、プログラムの変更を行わず要件の変動に対応することができることを理解してほしい。

設問 2(3)は、全社構成比を求める計算式を問う設問であった。この設問は構成比計算の仕様だけでは解答できず、部門費用計算の仕様を理解する必要がある。仕様全体をきちんと理解すれば正答を導ける問題であったが、正答率は低かった。

設問 3 は、構成比計算のロジックに関する設問であった。本問には、構成比計算処理と、構成比を使って費用配賦の計算をする処理があり、ここでは構成比計算処理で“売場部門の構成比の合計を 100%にする”ためのロジックについて問うている。ここを正しく理解できず、配賦される家賃の金額の問題と勘違いした受験者が多く、正答率は低かった。

システムアーキテクトとして、変動する業務要件を正しく理解・把握し、システムの適切な変更が行えるよう心掛けてほしい。

問 4

問 4 では、教育用システムの開発を例にとり、システムのアーキテクチャの検討及び構成機器の機能仕様の策定について出題した。全体として、題意はよく理解されていたようであった。

設問 1 は、教育用システム全体として実現できる機能を述べた解答が散見されたが、電子黒板の機能について答えてほしかった。

設問 2(2)では、本システムで扱う教材と直接関係しない外部機器にかかわる解答が散見されたが、授業での運用を考慮して答えてほしかった。

設問 3 は、正答率が高かった。本システムの運用についてはよく理解されていたようであった。

設問 4(1)は、2 台の電子黒板が連動する場合に、それぞれに共通する情報が何であることを考慮すれば、正答を導けるはずである。

システムアーキテクトとして、システム開発の要件を理解し、適切なシステムアーキテクチャの策定及び機能設計ができるよう心掛けてほしい。